

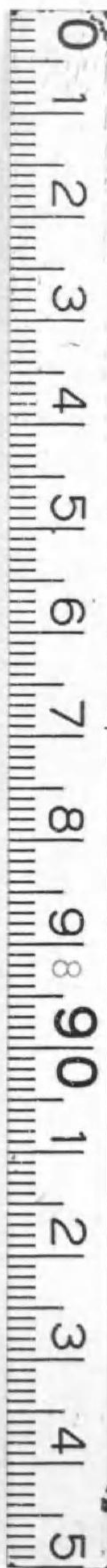
特 217

21

後醍醐天皇

嶽尾來尚謹誌

十種勅問講話



始



特217
21



十種勅問講話

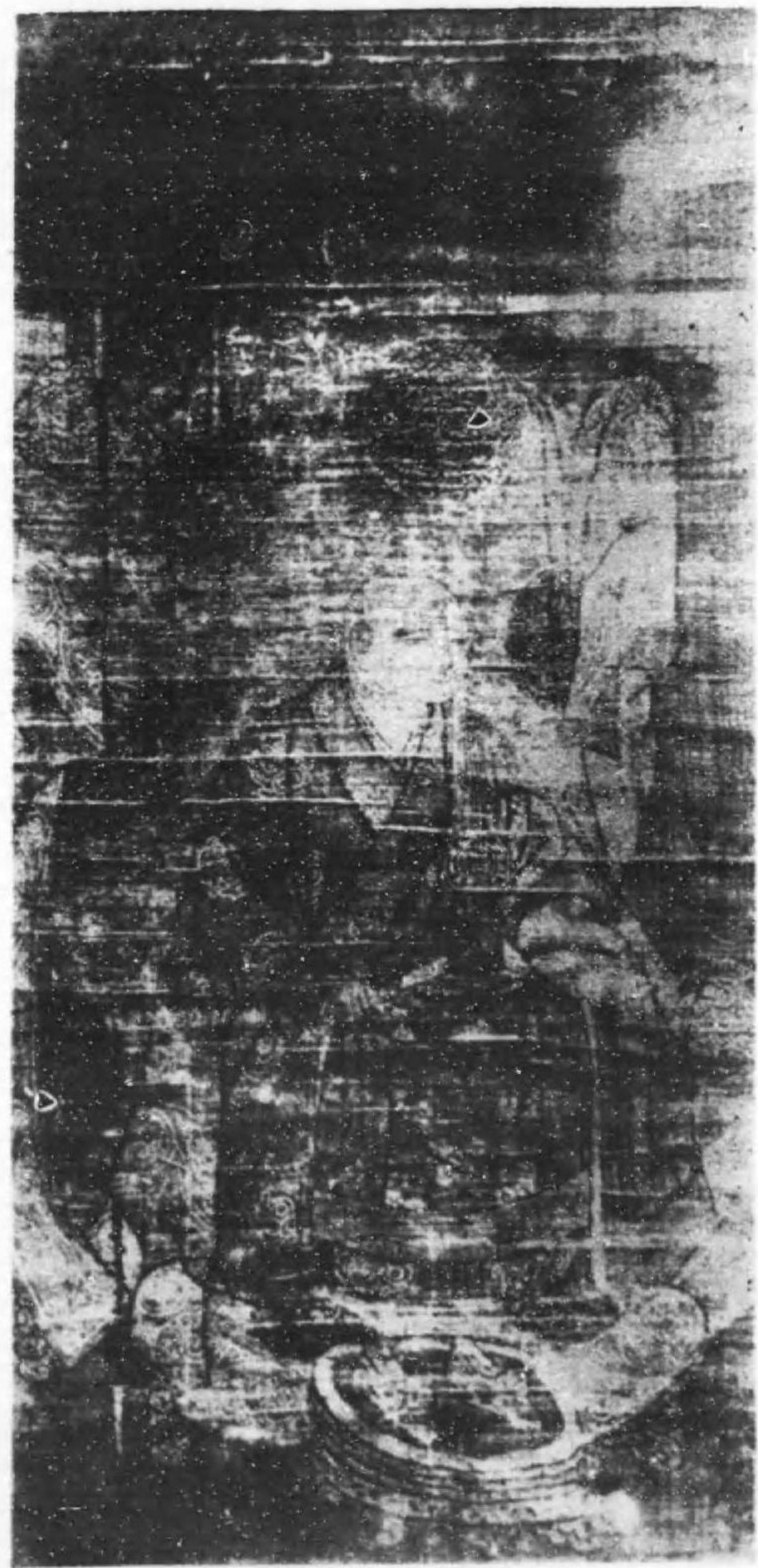


杉原信三郎氏





後醍醐天皇像



太 祖 大 師 尊 像



像 竹 師 老 尼 嶽



松原爲三郎

十種勅問講話目次

緒言	一
勅問の緣由	四
勅問一	二
奏對	三
勅問二	三
奏對	三
勅問三	三
奏對	三
勅問四	四
奏對	四
勅問五	五

奏對	五
勅問六	五
奏對	六
勅問七	六
奏對	七
勅問八	七
奏對	七
勅問九	八
奏對	八
勅問十	九
奏對	九

後醍醐天皇

十種勅問講話

嶽尾來尙 謹話

緒言

緒言

昭和三年は我等の最も喜ばしき年である。同年十一月十日、瑞光天に輝き祥氣地に普し。此日我が叡聖文武なる天皇陛下は淑哲仁慈なる 皇后陛下と共に京都皇宮に於かせられて、人皇百二十四代登極即位の御大典を擧げさせられた。我等七千萬の同胞は申すに及ばず、擧國の山

緒言

皇室と佛教との關係

川草木に至るまで至祝萬歳の靈感に打たれ、芽出度き極みであつた。此の光榮に浴したる予は何か報恩の行持として、岡極の恩徳に酬る奉らんことを考へた結果、本年各所で行はれた參禪會では、此の十種勅問を御話しするここにした。これは各方面より見て精神的に思想の善導となり、また皇室と佛教との關係を知らしむる便宜もあり、其他二三の考ふる事があつて之を選んだのである。抑も佛教が我國に渡來してより千數百年に亘りて、我が皇室と佛教とは深き因縁を結び、第一聖徳太子が推古朝の時に法華・勝曼・維摩の三經を講ぜられたるを始め、聖武天皇が行基菩薩より佛戒を受けられ、法諱を勝

滿と申し奉り、其後、孝謙天皇より後々の天皇方即ち、靈元天皇に至るまで、法皇ごならせ玉ひたる御方、また御授戒をなされ、入道せられたる方々が三十八天皇である。以て如何に皇室と佛教との關係が深かりしかを、想像するここが出来る。また御門跡寺院の數の澤山あることは世人の知悉する所である。其他皇室に於て佛教の儀式に據る各種の法要が勤修せられたるここのあるここも歴史の明記する所である。かゝる事を考へ起して、參禪會員の者に對し時に觸れて説示する便宜もあれば、此の十種勅問を提唱することゝしたのである。

十種勅問の緣由

勅問の緣由

常濟大師
瑩山紹瑾
大和尚

さて十種勅問とは、後醍醐天皇様が十種の勅問をなされたに對し、我が曹洞宗の太祖常濟大師、瑩山紹瑾大和尚、即ち大本山總持寺開山様が奏對し奉られた一篇の問答書よ名けた名前である。其の事蹟を總持寺二代峨山禪師の記し置かれた文に曰く、『今上皇帝十種の勅問を以て覺明禪者をして總持開山和尚に問はしむ、謹對、旨に稱ふ、是に於て總持寺を陞せて官寺に屬せしめ、行房に勅して額を書せしめ、禁門香火の地を爲す云々』乃ち、今上皇帝ご申すは今より六百餘年前、人皇第九十六代後醍醐天皇様の

後醍醐天皇

ここである、この天皇様は第九十一代後宇多天皇様の第二の皇子で、正應元年十一月二日に御降誕になり、文保二年三月、寶算三十一歳にて御即位ありて、在位二十一年を経て、延元四年八月十六日五十二歳にて崩御、大和國吉野山如意輪寺に葬り奉つた。此の天子さまは歴代の中でも取分け、英明にわたらせられて、後世建武中興の英主と崇め奉る御方である。然れども此の天子様の御宇には隨分世の中が亂れ、畏くも天皇の御身を以てすらも、『さして行く笠置の山を出でしより天か下には隱家もなし』と御詠遊ばされねばならぬ様なこともあり、また御座を隱岐に御遷しにならなければならぬといふこともあつた

勅問太祖大師に下る

孤峯覺明禪者

この兵馬佐徳の間にあつて、篤く三寶を信じたまひ、特に禪味の御研究に御心を傾けさせられ、當時の名僧碩學であつた大燈國師や關山國師、また次に述ぶる覺明禪者等の人々を御召しになつて、種々御下問を遊ばされて色色御修養のことが史上に明かに記されてある。而してこの十種の勅問を常濟大師に下されたは、元亨元年八月の事にて、天皇様は御年三十五歳の時である。その時の御使たりし覺明禪者といふ人は、號を孤峯といひ、奥州會津に生れ、初叡山にて出家し、後に臨濟宗に歸化し、應長元年に支那に渡りて天目の中峯禪師に參し、歸朝して後、常濟大師に參して菩薩戒を受けられたけれども、大

國濟國師

三光國師

瑞夢記

師記蒞して汝が縁は雲州に在りと言はれたるに感じ、雲州の宇賀莊に往いて雲樹寺を開き、法を紀州由良の法燈國師に嗣がれた。後醍醐天皇様は深く此の人に歸依せられ、勅して國濟國師の號を賜はれた。更に後村上天皇様はまた先帝の遺志を續がせられ、禪者を吉野の行宮に侍せしめられて、三光國師の號を賜はれた。かくの如く南朝二帝の深き歸崇を受けられ、康安元年五月二十四日、世壽九十一歳で遷化せられた。乃ち後醍醐天皇様は此の人が常濟大師の隨徒であつたことを聞召され、其の關係上、此の十種勅問を下したまふの勅使を命ぜられたのである。尤も總持二代禪師の『瑞夢記』に據れば、唯常

勅額下賜

濟大師のみに御下問になつたのではなく、他の諸高僧にも同じく問はせたまひたれども、常濟大師の奏對は理義明白なれば、一々勅旨に稱ひ、御感殊に斜ならず、勅して紫衣を賜はつた。また二代禪師の記文に『行房に勅して額を書せしめ云』とある。乃ち元亨元年九月十四日、藏人頭左近衛中將藤原行房卿に命じて總持寺の三大字を書せしめたる勅額を御下賜になり、特に陞せて一宗の僧綱大官寺に列せらるゝに至つたのである。行房卿は從二位世尊寺經尹公の子にして世尊寺家は世々能書を以て稱せられてをる。然して元亨二年八月二十八日 後醍醐天皇様は特に總持寺へ左の御繪旨を下し給はつた。『能州諸嶽山

繪旨

十條龜鑑第一條

總持寺は直に曹溪の正脈を續ぎ専ら洞上の玄風を振ふ、特に日域無雙の禪苑たるによりて、曹洞出世の道場に補任す、宜しく南禪第一の上刹と相並んで紫衣法服を著し寶祚の延長を祈り奉るべし。者は天氣此の如く仍て執達件の如し』この聖旨である。依て常濟大師は『總持寺十條龜鑑』第一條に『當寺は本より檀越なし、托鉢行乞して以て住持行道すべし、皇詔一たび降るに迨びて、朝家萬年の功德所と爲る、是より山中稍く瞻ひ足る、予が嗣法の門人、今より百千年の後に到るまで、當山を仰ぎて本寺と爲し、輪流住持して以て寶祚長久を祈り奉るべし』と云、是れ即ち總持寺の今日一萬二千有餘の門末を有して日本

曹洞一宗の大本山たる所以である。然らば其の朝家萬年の功德所爲りたる所以は如何なる因縁に依るかといふに、實に此の十種勅問の奏對深く叡慮に契ひたるに因るものであることが知れる。

これで先づ一通り十種勅問の由來を述べたから、以下勅問の一々に就いて、常濟大師の御答を謹話することにします。

勅問・奏對、讀方・義解

第一問の本文

勅問一曰。祖意教意、是同是別耶。

第一問の讀方

勅問の一に曰く。祖意教意、是れ同か是れ別か耶。

第一問の意義

勅問とは天子様の御下問といふこと、祖とは支那禪宗の初祖達磨大師を謂ふ。此の大師初その師なる般若多羅尊者の遺屬を承け、支那に來りて直指單傳の宗旨を唱ふるや、鷲頭に宣言して不立文字・教外別傳・直指人心・見性成佛ご喝破されたるを祖意と謂ふ。教意とは釋尊が生涯四

十九年の間、横説豎説なされ、それが後に華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃等の三藏十二分教、八萬四千の法門となつた。これ等の經論を説かれた意旨といふほどのこと。然らば達磨大師が宗旨を述ぶるに當つて、不立文字・教外別傳と喝破せられたとすれば、文字に依つて説明せらるべきものにもあらず、文に依て義を解する底の經論解釋で言ひ表はされるものでもない、只だ心を以て心に傳ふべきものであるから、教外別傳と謂はれた。依つて 天皇は疑を起された、達磨大師單傳の宗意と釋尊説法の經論の意味とが全く別の様になる、併し達磨大師は釋尊の流を酌むものである、果して然らば祖意と教意と全く別意

第一問奏對の本文

なりとせんか、將た同意なりとせんかこの御下問である。
太祖常濟大師これに奏對し給はく

師曰。祖教如水波。豈有異耶。雖然。教者多是纏經網、而不能脫洒。故古來參祖意得旨者甚多矣。太原孚上座初爲座主。在揚州光孝講涅槃經。有一禪者。阻雪在寺。因往聽講。至三因佛性三德法身。廣談法身妙理。禪者失笑。座主講罷請禪者喫茶。問曰。某甲素志狹劣。依文解義。適蒙見笑。有不到處。伏望見教。禪者曰。實笑座主不識法身。座主曰。如是解說何處不是。禪者曰。請座主更

說一遍。座主曰。法身之理猶如大虛。堅窮三際。橫亘十方。彌綸八極。包括二儀。隨緣赴感。靡不周徧。禪者曰。不道。座主說得不是。只說得法身量邊事。實未識法身在。座主曰。既然。如是。禪者當為我說。禪者曰。還信不。座主曰。焉敢不信。禪者曰。若如是。暫輟講。旬日於室內端坐。收念攝心。善惡諸緣一時放却。座主一依所教。從初夜至五更。聞鼓角聲。豁然契悟云。又西山亮座主謁馬祖。祖問。講甚麼經。亮曰。心經。祖曰。將甚麼講。亮曰。將心講。祖曰。心如巧伎兒。意如和伎者。六識為伴侶。爭解講得經。心既講不得。莫是虛空講得麼。祖曰。却

第一問奏對
本文の讀方

是虛空講得。亮拂袖而去。祖召曰。亮。亮回首。祖曰。是甚麼。亮豁然大悟云。此外、永嘉大師。圭峯宗密。良遂座主。長水子璿。本朝傳教。弘法二師等。參祖師禪。得印證者。不可勝計。

師曰く。祖そ之教けうは水みづと波なみとの如し。豈あに異ことなりあらんや。然しかうりいへと雖も、教けう者しやは多く是れ教網けうまうに纏まとはれて、而しかうして脱だつ洒しやなる能あたはず。故こに古來こらい祖意そいに參さんして旨むねを得うるもの甚た多おほし。太原たいげんの孚上座ふじやうざは初座主はじめてたり、楊州やうしやうの光孝くわうかうに在あつて涅槃經はんぎやうを講かうず、一禪者ぜんじやあり、雪ゆきに阻へかてられて寺てらにあり、因よつて往ゆいて講かうを聽きく、三因佛性さんいんぶつしやう三德法身さんとくほふしんに至いたつて、廣ひろく法身ほふしんの妙理めうりを談だんず、禪者ぜんじや失笑しつせうす。座主ざす講かうじ罷やりて禪者ぜんじやを

請して茶を喫せしめ、問ふて曰く、某甲素より志狹劣、
文に依つて義を解す、適く笑はることを蒙る、到らざる
處あらん、伏して望むらくは教へられよ。禪者曰く、實
に座主の法身を識らざるを笑ふ。座主曰く、是の如く解
説す何の處か不是なる。禪者曰く、請ふ座主更に説くこ
こ一遍せよ。座主曰く、法身の理は猶ほ大虚の如く、豎
に三際を窮め横に十方に亘り、八極に彌綸し二儀を包括
す、縁に隨ひ感に赴いて周徧せざるこそ靡し。禪者曰く、
座主説き得て不是は道はず、只だ法身量邊の事を説き
得て實に未だ法身を識らざるこそ在り。座主曰く、既に
然り、是の如くならば禪者當に我が爲に説くべし。禪者

曰く、還つて信ぜんや否や。座主曰く、焉ぞ敢へて信ぜ
ざらんや。禪者曰く、若し是の如くんば暫らく講を輟め、
旬日室内に於て、端坐して念を收め心を攝し、善惡の諸
縁一時に放却せよ。座主一に教ふる所に依り、初更より
五更に至る、鼓角の聲を聞いて豁然として契悟す云。ま
た西山の亮座主、馬祖に謁す。祖問ふ、甚麼の經を講ず。
亮曰く、心經。祖曰く、甚麼を將て講ず。亮曰く、心を將
て講ず。祖曰く、心は巧伎兒の如く、意は和伎者の如し、
六識は伴侶たり、争てか經を講じ得ることを解せん。亮
曰く、心既に講じ得ずこそすれば是れ虚空講じ得るこそ莫
しや。祖曰く、却て是れ虚空講じ得ん。亮拂袖して去る、

祖召して曰く、亮。亮首を回らす。祖曰く、是れ甚麼ぞ。亮豁然として大悟す云。此外、永嘉大師・圭峯宗密・良遂座主・長水子璿、本朝の傳教・弘法二師等、祖師禪に參じて印證を得るもの、勝けて計ふ可からず。

第一問奏對の意義

此の奏對の大意は、祖意と教意とは異なるものに非ざるも、文字章句の末を以て教意と心得るものには、到底祖意の眞面目を知ることを得ざる旨を示されたのである。さて、達磨大師傳來の宗意は、譬へば大海の水の如く、釋迦如來說法の教相は、譬へば波の如し、水を離れて波なく、波を擧げて悉く水なり、如來所說の意旨に背きたる

夾山禪師と孚上座

祖師傳來の宗意もなければ、祖師傳來の意旨も異つた如來の教意もない。然れども教論を講習する徒は、往々經論の言詮に束縛せられて自由に教旨に通達することが不能、之を教網に纏はれて脱洒なる能はずと申された。これ即ち言語文字の末に走つて脱洒と自由を得ることが出来ないこのことである。彼の波の動ける姿が其の儘に湛湛たる水の本性を失はないここに氣が付かない。然るに一朝祖師門下に參じて忽ち其の水の水たる所以を知り得て、始めて其の千波萬浪も皆そのまゝに湛寂澄清なることを悟れるもの其の例に乏しからず。太原の孚上座は達磨大師十二代の祖師雪峯義存禪師の弟子である、最初は

經論の講師をして居られた、座主云ふは講座の長で即ち講師のここである。ある時、楊州の光孝寺に於て涅槃經の講義をして居られた、其寺に拜宿した一人の禪僧が雪の爲めに出立することが出来ず滞留して、涅槃經の講義を傍聽した。時に孚上座は涅槃經の肝要なる三因佛性三德法身の義を講じ、辯に任せて盛に法身微妙の理を説明せられた。この三因佛性は正因佛性、了因佛性、緣因佛性のここで、正因佛性は人々本來具へて居るところの佛性、了因佛性は人々本來佛性を具して居るところを覺る智慧、緣因佛性は一切の修行及び諸の善根のここを云ふのである。一切衆生は悉く佛性ありと言ふ

三因佛性
正因佛性
了因佛性
緣因佛性

三德法身

智德
斷德
恩德
法身

ご雖ごも、これを各自に證得する上に於て成佛の結果が得らるゝのである。また三德法身は智德・斷德・恩德の三つにして、佛身の果報を三つに分類したものである。智德は一切智及び一切種智を成就したところに名け、斷德は前の一切智及び一切種智を覆ひかくす一切の無智を斷じ盡したところをいひ、恩德は佛が他を利益し教化する利他の功德を言ふのである。法身とは盡法界に充ちて居る理性のことで、佛菩薩はいふまでもなく、吾人に至るまで心の奥に具へて居る智慧の光をいふのである。かやうの譯で孚上座が滔々辯じ去り辯じ來るを聽いて、彼の禪僧は思はず笑ひ出した。此の禪僧は實は船

子徳誠禪師の法嗣、夾山善會禪師のここである。孚上座はその笑へる聲に出格の力あることを知り、人我の見を棄て、講義の畢つた後、禮を厚うして彼の禪僧を招ぎ茶菓の饗應なごして、徐ろに口を開いてまうさるゝには、某甲はもごより志の狹劣なる者にて研究も行届かざれば法身の妙味を知るに至らず、僅かに文字に依てその義理を解釋するに過ぎず、それ故に今日は尊師の爲に笑を招くここゝなり慚愧千萬、定めし我が説く所に不徹底の所有るならん、願は缺點を指摘し教を垂れられんことを懇望せられた。禪僧も亦この人の道念の厚きを感じ、答へて云はるゝには、實に御説の通り座主は能く法身を説け

ごも未だ眞の法身を知らざるを笑ひたりご。そこで孚上座は更に問ふて云ふには、法身に就ては前に述べた通り心得て居るが、何の處が不是であるか、禪僧の曰く、請ふ座主更に先の如くに一たび説明せられよ、孚上座曰く、法身の道理といふものは、恰も大虚空の際限なきが如く、豎(時間的)には過去・現在・未來の三際を窮め、横(空間的)には東西南北、四隅上下の十方に亘り。八極は地の窮まり盡るところを極といひて、四方四隅の大地を盡して其の間に彌綸し行き亘つて居る。然して天地間の萬物はみな陰陽二儀の中に含まれて仕舞ふか、其の陰陽二儀すらも此の法身の中に包まれて仕舞ふ、然り而して縁に

隨したがひ感かんに赴おもむきて周徧しゅうへんせずといふこと無し、依いて苟いさくも天の覆おほふところ地の載のするところ、みな法身の所現しよげんなれば、何處どこにても法身を見出すことが出来る云々、こ述べられた。そこで禪僧のいふには法身に就つて座主の説明が間違まちがつて居るこはいはぬが、只法身量邊りやうへんの廣ひろさ大きさ長さ等の限かぎりなき分量邊際ぶんりやうへんさいの相狀さうじやうのみを解釋げしやくして、實に未だ限りなき法身其者の果はたして如何いかなるものであるかといふことに就すては、少すこしも御存知ごぞんちがない様である。座主曰く、誠まことに御説ごせつの通りである、然しからば願ねがはば尊師の説明を聞かして戴いたきたい。禪僧こゝに於おて言語を以もつて法身を説とくことをなさず、只だ言ふ、還かへつて信しんぜんや否いなやと、蓋けみし信決定しんけつじやうせ

ざるものは百事ひやくじみな成就じやうじゆせざれば、かくも念ねんを押おされた。座主曰く、ごうして信しんぜずに居ゐられませう。是れ即ち座主の心中一念も禪僧を疑うたがはず、此の如くして始めて祖意を聞くことを得る資格しかくありといふべきである。禪僧之に示しめしていふには、暫しばらく口舌を以もつて涅槃經の文言もんごんを講義かうぎするここを止め、十日間許かんだいり一室内いつないに閉とち籠こもつて正身端坐しやうしんたんざの坐禪をして、心念しんねんを静しづめ思慮しりよを收おさめ、惡事あくじは更さらにも言はず、善事ぜんじと雖なごも身に行いひ口に語かたることなく、心に思ふこともなく、一切さいの事緣じえんみな一時に投なげ捨すて、之これに關かんすることなきが、是れ即ち佛祖單傳ぶつそだんでんの修行法しゆぎやうほふであつて、これに由よつて法身の何者たるかを知るここが出来らるであらう

鼓角を開き字
上座大悟す

と。そこで座主は一室に坐禪して一意専心、禪僧の教へた儘を守つた、僅か初夜より五更の黎明に至る一夜の中、時間を報ずる鼓角を鳴らす聲の偶然に耳に到るを聞いて、夢の醒めたるが如く豁然として大悟し、所謂眞の法身其の者を會得するここが出来た。是より孚上座は經を講ずることを止めて諸方を徧參し、遂に法を雪峯の眞覺禪師に嗣ぎて祖師位に列するに至つた、只々是れ禪僧の一言を信じて一夜の坐禪をした爲に、十年の講經も及ばざる自由無碍を得たのである。また西山の亮座主は達磨八世の嫡傳たる江西の馬祖道一禪師の法嗣八十餘人の中の一入であるが、初經論を講ずる人であつた。或時、馬祖に

馬祖禪師と亮
座主

謁したるに、馬祖は亮座主が經論を講ずる人であることを知つて、何の經を講義して居つたかを尋ねられた。座主は心經を講義して居つたと答へた。馬祖曰く、何を以て心經を講義したか尋ねられた。之は普通の場合には問ふべきでないことながら、禪門ではこれが大切の所で、身を以て講ずるや、舌を以て講ずるや、眼を以て講ずるや、耳を以てするや、骨を以てするや、肉を以てするや、乃至行住坐臥を以て講ずるや、喜怒哀樂を以て講ずるや、畢竟如何と問ひ試みたのである。座主は心を以て講義して居りますと答へた。馬祖曰く、心は巧伎兒の如く即ち戲曲を作る人の如く、意は和伎者の如く即ち其の戲曲を

演ずる人の如く、然して前六識は其の演者を助くる人のやうなものであるから、争てか經を講じ得ることを解せんやと示された。この六識は眼耳鼻舌身意の色聲香味觸法に對して起るところの妄想分別である。意は第七識の末那識といひ、心は第八の阿頼耶識と名くと雖も、要する所は一も其の實の認むべきものなく、因縁所生の有爲の法にて、恰も一場の遊戲の如く、その實體のないものである。是の如きものが般若波羅密多の心を説いた眞經を講ずることは出来なからう、さあどうであると手厳しい御尋ねである。馬祖の提撕深切を極め、亮座主をして講經の眞意を知らしめんとせらるゝ大慈悲心が現はれて

をる。是に於て亮座主も幾分か會得する所があつたと見える。依つて御説の通り心が講ずることが出来ないとするれば、虚空が講ずることが出来るでありませうといつた。これは吾々が一たび其見地に至つて見れば溪聲廣長舌、山色清淨身で、みな説法講經ならざるはない、故に心意識は經を講ずること能はざるも、虚空は能辯に心經を講じつゝあるといふことが出来るとしやうといふにある。そこで馬祖は暫らく之を許せるが如く、心よりは却て虚空の方が講じ得ることが出来やうといはれた。依つて亮座主は袖を拂ひ轉向いて馬祖の面前を起ち去つた。馬祖は忽ち呼び止めて、亮といはれた。亮座主は其の語に従

馬祖一喝亮座
主頓悟

つて振返つて見た。馬祖は勵聲一番、是れ何物ぞと詰問された、即ち聲に應じて頭を回すものは何物である、心とせんや虚空とせんやと問はれた。亮座主は其の勵聲一番の下に自由を得て佛祖單傳の妙旨、講經の眞意を悟了することが出来た、若し馬祖の會下に投ぜざりしならば幾年を経るも講經の眞意を知るに由なかつたであらう。以上は只々太原の孚上座と西山の亮座主との二人を擧げて、此等の人が經論の解釋に於ては博學多識を誇るに足るも、未だ經論の妙旨即ち佛世尊の說法の眞の教意を知ることとは出来なかつた。然るに一たび祖門下の提撕に依り始めてその妙旨を識得することが出来たことを述べ、

永嘉
宗密
良遂
子瑋
傳教
弘法

かゝる例はこの二人に限らない、この外、嘗て教家の碩學なりし永嘉大師玄覺は六祖慧能大師に參し、祖門の宗乘に徹底し、證道歌を著してその旨を述べ。圭峯の宗密は華嚴宗の第七祖なるも、六祖大師の法孫、遂州の道圓禪師に參し、禪源所詮を著して所見を述べ。良遂座主は六祖四世の孫、麻谷の寶徹禪師に參し。長水の子瑋は六祖十二世の孫、瑯琊の慧覺禪師に參せられた。また本朝の天台宗祖傳教大師は法相宗の學匠たりしに、桓武天皇の延暦年間に入唐して天台宗と密教と禪宗とを傳へられた。就中、禪宗は脩然禪師に隨ひて機縁投合し、牛頭一派の宗旨を傳へられた。また眞言宗祖弘法大師は禪門に參投せら

れたるの機縁を詳かにせざれども、嘗て 嵯峨天皇に上書して、高野山の地を賜はらんことを請ひたる文の中に『今や、禪經の説に準ずるに深山平地、尤も宜しく禪を修すべし、空海、少年の日、好んで山水を涉覽したりしに、吉野より南に行くこと一日、更に西に向つて去ること兩日程、平原幽地あり、名けて高野と曰ふ(中略)上は國家のため、下は修行者のために、荒藪を芟り夷げて、聊か修禪の一院を建立せんと思ふ云。』是に由つて之を觀れば、弘法大師は常に禪を修せられたることが明かである。而して其の修禪の旨、自ら祖意に契ふものあることも亦當然である。斯くの如くみな達磨大師傳來の禪法に參じて、

第二問の本文

始めて教の眞意を了得し、印可證明を得られたのである。此の他、猶ほ甚だ多きを以て、勝げて計ふべからずといはれた。此等の例に依つて祖意と教意との關係が如何なるものであるかが知られるといふ常濟大師の奏對である。

勅問二曰。達磨是香至國王第三子。而四大五蘊具足身也。依何乘一莖蘆耶。

第二問本文の讀方

勅問の二に曰く。達磨は是れ香至國王の第三子。而して四大五蘊具足の身なり。何に依つてか一莖の蘆に乗るや。

第二問本文の意義

この勅問は、世に芦葉の達磨と稱して、達磨大師が一片の蘆葉に乗つて水を渡る姿を畫けるものがある。今後醍醐

達磨大師

四
風火水地
大大大大

天皇は、其の圖を御覽になつて斯様な疑問を御起しなされたと見える。達磨大師は南天竺の香至國王の第二子にして、釋尊より第二十七代の般若多羅尊者の弟子となり、師の命を受けて梁の大通元年（又は普通八年ともいふ）百二十歳の高齡を以て支那に來り、九年の久しき少林山に面壁坐禪し、遂に法を二祖慧可大師に傳へた人であるから、よし不世出の英才の人なりとも、既に人の子として生れたる以上は、四大・五蘊具足せる人間の肉身なることはいふまでもない。四大とは佛教其他、印度の古い學派では如何なる物質も必ず堅濕煖動の四大性質より出來上り而して此の堅濕煖動の四大性質を、地大・水大・火大・風大

五
行色蘊
識受想

と名けて、四大と呼んでをる。五蘊とは、われ／＼人間は皆、色・受・想・行・識の五蘊から出來て居る、といふのが佛教の通説である。此のうち、色といふは物質のことで、前の四大に當り。受・想・行・識はそれ以外の心及び心の作用を指すのであるから、五蘊は肉躰と精神と、又は身と心と、このこと、思へばよい。然るに斯の如き肉身を持ちながら、一葉の芦に乗つて水の上を渡るといふは、其の理なきに似たり、之を如何に解釋すべきものであるかこの勅問である。然るに後醍醐天皇は當時既に禪門の諸尊宿に參ぜられ、禪學の研究に御心を傾けさせられたるに、是の如き幼稚なる問端を發したまふのは、甚だ受取れぬと思は

第二問奏對の本文

れる點がある。畢竟は常濟大師の活作略を檢せやうとせられたものに相違ない、故に常濟大師の奏對も其平生に似ざるものがある。それは嘗て傳光錄達磨の章に、此事を論斷して『尋常人思はく、一葦云は一のアシなりと、之に依つて一枝の葦の葉の上に祖の身を載せるには非ざるなり、謂ゆる一葦といふは渡りの小舟なり、アシには非ず其形アシに似たり云云』と述べられてある。然るに今の奏對は、所謂變に臨み機に應ずる活作略が窺はれるのである。

師曰。諸佛諸祖。有不可思議神通妙用。非凡情所可測。偏是佛法靈驗之所致也。達磨雖是爲香至

第二問奏對本文の讀方

國王子。實是觀音大士化身也。豈可無神通妙用耶。雖然於祖門下。以神通妙用。不爲奇特。龐居士曰。神通並妙用。運水及搬柴。

師曰く。諸佛諸祖、不可思議の神通妙用有り、凡情の測る可き所に非ず、徧へに是れ佛法靈驗の致す所なり。達磨は是れ香至國王の子なりと雖も、實に是れ觀音大士の化身あり、豈に神通妙用なかるべけんや。然りと雖も、祖師門下に於ては、神通妙用を以て奇特となさず。龐居士曰く、神通並に妙用水を運び及び柴を搬ぶ。

第二問奏對の意義

此の奏對は先方の問處を翻弄しつゝ、眞の神通妙用の端的

を述べられたのである。さて諸佛諸祖即ち三世の諸佛や歴代の祖師方は、修行の結果として得たる、自由自在の不可思議の神通妙用を以て居られるから、到底普通人の心を以て推測することは出来ない。只だ佛法の不思議の靈驗を見るより外はないと、問端を翻弄して其の位置を轉ぜしめられて。成程達磨大師は香至國王の王子として生れては來られたるも、實は觀音菩薩が一切衆生を救はんが爲に、假りに王子として身を變じたに過ぎない。故に自由自在、不可思議のはたらきあることは寧ろ當然で、敢へて怪むに足らぬ。更に一步を進めて言へば、觀音菩薩果して何物ぞ、眼見耳聞何物か復た觀音菩薩の化身ならざる。

故に我が佛祖單傳の門下に於ては、世人の認めて不思議とするところの神通妙用も亦敢へて不思議とか奇特とかはなさない、何となれば吾等日用光中運作轉動、喫茶喫飯みな是れ神通妙用といはねばならぬ。然れば物珍らしく考へるここを要せない。龐居士が水を運び柴を搬ぶも皆是れ神通妙用であると言つて居るのは、此間の消息を道破したものと云つてよい。されば芦葉の達磨大師もこの立場より考へて見たならば、思半に過ぐるものがあるであらうこの奏對である。

第三問の
本文

勅問三曰。禪家所謂不立文字教外別傳矣。雖然、

一大藏經皆是文字。禪家語錄亦是文字。若無文字。佛祖言教。依何流布末世耶。

勅問の三に曰く。禪家に謂ゆる不立文字・教外別傳。然り。雖も、一大藏經は皆是れ文字なり。禪家の語録も亦是れ文字のみ。若し文字なくんば佛祖の言教、何に依つてか末世に流布せん耶。

第三問本文の讀方

第三問本文の意義

禪家以外の宗派に於ては教相を主とし、文字言句に依て佛法を説明しやうと試みて居る。天台宗が五時八教を立つるも、華嚴宗が五教四無礙を論ずるも、皆この意に外ならぬ。故に若し一字たりとも誤らば教相忽ち紛亂して、遂

にその所詮なきに至るを以て、その文字を重ずることが甚だ深い。然るに今この禪宗に於ては初より不立文字・教外別傳と稱して、文字言句以外、經論等以外、別に單傳の妙法があること主張して居る。さりながら、如來施設の一代藏經即ち有りこ有らゆる佛教の經論はいふに及ばず、禪宗門下に傳へて居る碧巖集とか從容錄とか傳燈錄とかいふ語録の類は、みな文字を以て録せざるものはない。若し文字を以て説明することを須ひずといふならば、諸佛諸祖の言教は、如何にして末世の今日に至るまで、弘まり傳はるここが出来やうか。故に禪宗にいふ不立文字・教外別傳といふことは、甚だ疑はしいこの御下問である。

第三問奏對の本文

師曰、文字是魚兔筌蹄也。若得魚兔、則筌蹄渾是無所用也。修多羅教標月之指也。若觀月、則指亦無所用也。然人皆認筌蹄、不得魚兔。認指頭、不觀月。故曰不立文字也。世尊四十九年、豎說橫說。至最後、拈一枝華示衆。衆皆默然。唯迦葉尊者、破顏微笑。是則不立文字、教外別傳之極致也。

第三問奏對の本文の讀方
文字經論の末に拘泥する勿れ

師曰く、文字は是れ魚兔の筌蹄なり、若し魚兔を得れば、即ち筌蹄渾て是れ用ふるころ無し、修多羅の教は月を標するの指なり、若し月を觀れば、則ち指も亦用ふるところ無し、然れども人皆筌蹄を認めて魚兔を得ず、指頭を

第三問奏對の意義

得魚忘筌
(莊子)

認めて月を觀ず、故に不立文字と曰ふなり、世尊四十九年、豎說橫說、最後に至つて一枝の華を拈じて衆に示す、衆皆默然たり、唯だ迦葉尊者のみ、破顏微笑す、これ即ち不立文字、教外別傳の極致なり。
この奏對は文字を捨つべし、經論は要せないといふにあらず、只だ其の文字、經論の末に拘泥するのを斥けたに過ぎないといふのである。
さて文字言句は物に譬ふれば魚を捕る筌、兔を捕る蹄の様なものである。既に其の目的たるころの魚兔を得て仕舞へば、之を獲るに用ひた筌蹄は無用である、今文字

一切經文標
月之指也
修多羅(經)

も其の通りで、只々その道理を言ひ顯はす爲の道具たるに過ぎない、既に能く其の道理を會得し畢れば、文字に用事はないのである、釋尊既に圓覺經に於て其の事を示されて、修多羅の教は猶ほ月を標するの指の如しと申されてある。修多羅は梵語、漢譯して經と曰ふ。即ち一切の經文は未だ月を知らざる者の爲に、指を以て之を標示するまで、己に月を觀て仕舞へば指には用事はない、然るに世人の多くは魚兔を得るの道具たるに過ぎない筈蹄のみを見て、その目的たる魚兔を忘れ、月を指す指のみを見て、肝要な月を見落して居るやうに、道理を知る爲の具である經論の文字言句にのみ拘泥して、遂に如來

拈華微笑

の眞意を悟ることが出來ず、妄りに名相言句に執著して、將錯就錯して居る、是に於て如來は此の病を救はんが爲に、四十九年の間、機に臨み變に應じて三百餘會の豎説横説の教化あるにも拘らず、その最後に至りては、八萬の大衆を靈鷲山上に集め、演壇に上られたが、默然靜坐、一言半句の説法もなく、只々大梵天王が献じた一枝の金鉢羅華を手に取り、大衆面前に拈出された、大衆は事の意外に驚いて誰一人、その意を知るものもなかつた、只々一人迦葉尊者が之を見て莞爾として破顔微笑された。これが即ち以心傳心で、言語文字の説明し得るところでない、そこで佛が初て語を發して、『吾に正法眼藏涅槃妙心、

實相無相微妙の法門あり、摩訶迦葉に附屬す。』と申され
 た。これが有名な拈華微笑の話である、これは畢竟、文
 字言句を以て説明することの出来ない、甚深の妙理を如
 何にかして之を傳へんとする、如來の大慈悲に外ならぬ。
 これ即ち甚深の道理は文字言句の道具に依つて説明の出
 來ない、所謂、不立文字・教外別傳の極致である、これを吾
 が禪門に於て傳燈附法二十八世にして達磨大師に至り、
 遂に支那に傳ふるに及びて、他の經論章句に滯る輩が、妄
 りに文字の末に走りて甚深の道理を明むることの出來な
 いのを愍んで、不立文字・教外別傳と喝破するに至つたと
 の御答へである。要する所は文字を棄つべし教相を要せ

第四問の
本文

ずと云ふには非ず、只々その文字に執著し教相に拘泥す
 るを斥けたに過ぎないのである。

勅問四曰。有曰。此身四大假合也。命終之時。地大歸
 地。水大歸水。火大歸火。風大歸風。然則有何物墮地
 獄耶。

第四問本
文の讀方

勅問の四に曰く、有るか曰く、此の身は四大假合なり、命
 終るの時、地大は地に歸し、水大は水に歸し、火大は火
 に歸し、風大は風に歸すと。然らば則ち何物あつてか地
 獄に墮する耶。

第四問の意義

六道

世人多くは古より今に至るまで是の如き斷無の邪見に陥つてゐる、その邪見の者の謂く、吾等人間の肉身は、宇宙の間に充塞する所の堅濕煖動の四大性質が假りに集合して出来てゐる、即ち肉體中の筋骨等の堅性なるは地大から出来て居り、血液等は濕性なる水大から、體熱等は煖性の火大から、手足等の動性なるは風大から出来て居る。されば若し人、壽命盡きて死するときは肉體中の各部分は各々其の本源に復歸して了ふこととなる。斯の如く各自分散して仕舞つたならば、畢竟何物か未來に生を受けて地獄に墮落するやとのことなるが。

さて佛教では迷の世界を分類して地獄、餓鬼、畜生、修

羅、人間、天上の六となし、これを六道と稱して居るが、地獄は其の一で六道中で最も苦痛の多い所を一つ擧げて外の五道をも含まして居るのである。

第四問奏對の本文

師曰。命終之時。見四大離散無一物。外道之空見。因果撥無底之見解也。依今生善惡業因。來生感依身。或生天堂。或入地獄。餓鬼。畜生。受種々苦。諸經說分明也。若是得爲大解脫人。可說無地獄無天堂也。

第四問奏對の讀方

師曰く、命終るの時、四大離散して一物無しと見るは、外道の空見にして、因果撥無底の見解なり。今生善惡の業

因いんに依つて、來生らいしやうに依身えしんを感ず、或は天堂てんたうに生れ、或は地獄ぢよく、餓鬼がき、畜生ちくしやうに入り、種々の苦を受く、諸經しよけいの説せつ分明ぶんめいなり。若し是れ大解脫たいげだつの人たるを得ば、地獄なし天堂なしと説く可し。

第四問奏對の意義

解説と業報相續

此の奏對の要は業報相續ごふはふきやうぞくの味あじます可からざるを述ぶるとともに、併せて大解脫たいげだつの人と業報相續との關係を述べられたのである。さて命終めうじゆうの時四大離散しよだいりさんするとは佛教に於ても説くけれども、而も更に其他に一物も留まるものがないとは説かない。これを説くものは印度其他いんどうちたに古よりある一種の邪見

で、これ等の説は佛教以外の者の主張するところであるから、外道げだうの空見くうけんと稱するのである。佛教に於ては吾々人間は死と共に四大所成しよだいじやうの肉體は、それ〴〵本源ほんげんに復歸ふくきすと雖も、而も生前中せいぜんちゆうに於て造り成した善惡の業は決して滅するものではない。これ等は善因善果・惡因惡果の因果いんぐわの法則はふそくに依つて、未來の果を感ずるものである。然るに今勅問こんじきんに擧げたまへるが如く、今生こんじやうの命終めいじゆうると共に四大は本源ほんげんに復歸して又一物もなく、全く空くうに歸すると見るは、因果の本則を信ぜざる、業報ごふはふの道理だうりに暗くらき、取るに足らぬ淺薄あさはかな見解けんかいである。故に本文に今生善惡の業因いんに依つて來世に依身えしんを感ず云とある如く、吾人は今生の

命終るとき、今生中に造り成した善惡の業因に依つて、それ相應に父母所生の此の肉身を受け、善業のものは、天堂や人間に生れて善果を受ける、惡業のものは地獄や餓鬼や畜生に入りて惡果を感じ、種々の苦惱を受くるに至るといふのが佛教の教であるから、諸經の説分明なりと申された。

要するに因縁假和合なるが故に常有とは云へぬ、然れども業報相續するが故に斷無とは云へぬ。乃ち四大は四大に歸すと雖も一生所作の業報は必ず來生の果を感ず、これを佛教通途の正見とするのである。しかし是は吾人迷情の凡夫に就て述べたのであつて、若し大解脱の人即ち

大悟底の人であつたならば、地獄に入り天堂に處する皆これ菩薩の行願とする所なれば、地獄に入り天堂に往く悉く衆生濟度の好因縁にして、行くとして可ならざるはなく、隨處に主となりて無碍自在の活生涯で、地獄の地獄とすべきなく、天堂の天堂とすべきもないからであるとの御奏對である。

勅問五曰。人皆爲先考先妣雖備靈供獻茶湯少許無消不知受供否。

勅問の五に曰く、人皆先考先妣の爲めに、靈供を備へ、

第五問の本文

第五問本文の讀方

茶湯を獻すと雖も、少許も消ゆることなし、知らず供を受くるや否や。

第五問の意義

先考は亡父のこと。先妣は亡母のこと。世の人々が先亡の父母の靈位に對して如何なる供物茶湯等を備ふるも、その供物少しも減ぜず、もし亡靈が其等の供物を受取るならば幾分なりとも分量が減るべきものを、そのことなし、然らば何を以て其の供物を受けたるの證とすべきや如何との勅問である。

第五問の本文

師曰。如蜂採花。但取其味不損色香。何消之有哉。

又俱舍世間品曰。中有以香爲食。由食香故名健達縛。若少福者。唯食惡香。若多福者。爲食妙香。云云。

第五問奏對本文の讀方

師曰く、蜂の花を採るに、但だ其味のみを取て色香を損ぜざるが如し、何の消すること之れ有ん哉。また俱舍の世間品に曰く、中有は香を以て食と爲す、香を食するに由ての故に健達縛と名く、若し少福の者は、唯だ惡香を食す、若し多福の者は、妙香を食すと爲す云云。

第五問奏對の意義

この奏對は要するに亡靈の供養を受くるは只だその香氣

若しくは子孫の供へんとする至誠より出づる芳味のみであることと云ふことを述べられたのである。蜂の花を採るに但だその味のみを取て色香を損ぜざるが如しといふの譬喩は如來最後の教誡たる遺教經に、凡そ佛弟子たるもの、食事に關する觀念を教誡せられたるものにして、その食物の善惡多少を論ぜざれとの意なるを、今は轉用して、その味のみを受けてその形に異動なきことの譬喩とせられた。蜂は甘味のみを取り花の色香は少しも損せない。今先亡の父母の靈が供物茶湯を受くるも、亦それと同様であつて、減ずることのないのは當然である。また俱舍論の文を引かれたが、俱舍論は西曆紀元四世紀の頃、印

度に出られた世親菩薩の著で阿毘達磨俱舍論と稱してをる。この書は九品三十卷より成つて居るが、九品の中、世間品には三界二十五有の相を説いて、有情生死の次第を生有・本有・死有・中有の四有に分ちて説明してある。生有とは出生の一瞬間をいひ、本有とは出生より死去に至るまでの間をいひ、死有とは死去の瞬間をいひ、中有とは本有中に於ける作業の極善極惡の者は別であつて、死ぬると同時に來生の生緣定まれども、其他のものは今生の身死して來生の身未だ定まらざる中間をいふので、この中有の身は人間の目には見えないが、五六歳の小兒の如くで、僅に七日の間を一生の命として居る、七日過

健達縛

きて未だ來生の生縁が定まらなければ、更に中有の身を
 受け、幾度も死しては生れ、生しては死する。併し七日
 づつ七度び即ち七々四十九日を過ぐる間には必ず來生の
 身を受くるものである。人の死した後、七日七日の法事
 を勤め、四十九日に至つて止めるのは此の理由である。
 然るに中有の身は己に人間と異なるから、その七日間の命
 を保つ食物は只だ香氣のみである、香氣を食とするから
 亦健達縛とも名ける。健達縛は梵語で漢譯して尋香とい
 ふことになるからである。さて又中有の身も前生の福業
 少きものは悪しき香氣のみを食とし、過去に福德多き因
 縁を結んだものは妙香即ち好き香氣を食料とするといふ

ことが説いてある。この俱舍論の説と前の蜂が花の甘味
 のみを取つて、色香を損ぜざることを思ひ合せて考へた
 ならば、自然疑團は氷解せらるゝであらう。この勅問の
 意は幼稚であるから随つて奏對も亦甚だ力が無い様に考
 へられる。

第六問の
本文

勅問六曰。世尊於雪嶺。六載修行。明星現時。
 忽然大悟曰。我與大地有情非情。同時成道矣。
 悟人最可成道。迷人依何成道。

第六問の
本文の讀
方

勅問の六に曰く、世尊雪嶺に於て、六載修行、明星現す

る時、忽然として大悟して曰く、我れこ大地の有情非情と、同時に成道すと、悟人は最も成道すべし、迷人は何に依つて成道するや。

第六問の
意義

釋尊出家以來、雪嶺は雪山のこと、今の比馬拉耶山の麓に於て苦行をせられ、後に伽耶の菩提樹下に端坐思惟せられ、十二月八日曉天の明星耿々として東に上るを一見し、忽然として無上正覺を成したまふ、是に於て宣言して、我れ今この正覺を成じたは我れ一人正覺を成じたるにあらず、天地間の有らゆる人天鬼畜より山川草木に至るまで、皆一時に無上正眞の道業を成辨せりと。これ實

第六問の
對の本文

に佛法最第一の目的にして、釋尊始めて其の最大目的を達したまふたのである。天皇は此如來の宣言に疑念を抱かれて曰く、凡そ自ら發心修行して大悟徹底する人は釋尊と同じく佛道を成ずることも出来るであらう。併し未だ其地に至らずして煩惱妄想、我見執著の中に彷徨し迷情の境を出づることの出来ないものは、如何にして能く、釋尊と共に成道することが出来やうか、況んや草木瓦礫等の非情をやとの疑問である。

師曰。經云。始知衆生本來成佛云。衆生從本以來。雖具佛性。日用而不知。釋迦老子。成道端的。

開活眼觀之。則草木國土悉皆成佛也。六祖曰。悟則衆生是佛。迷則佛是衆生。生佛元無隔。迷故爲衆生。悟故爲佛。衆生若無迷。與佛何別。故四十九年說法。度迷衆生。令見本有佛性也。

師曰く、經に云く始めて知る衆生、本來成佛と云。衆生本より以來、佛性を具すと雖も、日に用ひて知らず、釋迦老子、成道の端的、活眼を開きて之を觀れば、則ち草木國土悉皆成佛なり。六祖曰く、悟れば則ち衆生是れ佛、迷へば則ち佛是れ衆生、生佛元隔てなし、迷ふが故に衆

第六問奏對本文の讀方

第六問奏對の意義
衆生本來成佛

生と爲り、悟るが故に佛と爲る、衆生若し迷ひ無くんば、佛と何ぞ別たん。故に四十九年の說法、迷の衆生を度して本有の佛性を見せしむるのみなり。

此の奏對は要するに生佛不二といふことを述べられたのである。「始めて知る衆生本來成佛」といふ語は圓覺經の文で之に續いて「生死涅槃猶昨夢の如し」とある。凡そ生きとし生ける一切衆生は發心修行して後に佛になるといふではなく、久遠劫の昔より已に佛に成つて居るのである。抑も一切衆生はもとからして佛であるべき性質即ち佛性を具へて居て、毎日毎日その佛性を使用して居るけれど

人身に健康
と疾病ある
が如し

も、吾人の心の月が煩惱妄想の黒雲に覆はれて居る悲しさ、それを知ることが出来ないのみである。「雲晴れて後の光と思ふなよ元よりそらに有明の月」である。ゆるぎに衆生といひ、佛といひ、生死の迷といひ、涅槃の悟といふは、譬へば人身に健康と疾病とあるが如きもので、本來人々は健康なるべきものなれども、一たび病氣の起ることあれば、身心すべて調和を失ひ、衣食にも坐臥にも皆自由ならず。健康の人には何の苦痛もなきことが、病人には非常に苦痛を感じ、喜怒哀樂の情も亦その適度を得ないことになる。然るに治療功を奏し全快した時は病苦を除きたるまでのことにて、別に健康といふものを得

有情無情一
切成佛

たのではなく、健康は本來我が身に具へて居たのである、これが只だ我身一人の事にはあらず、千人萬人みな此の道理に外ならない。加之、一身健康に復すれば嘗て見るもの聞くもの衣食も坐臥も皆苦痛の種なりしものが、今は悉く快樂のものならざるはなきに至る、これ即ち天地萬物までも健康の姿となるのである。今釋尊が明星一見大悟徹底なされた當處、活眼を開いて此の天地間を御覽になるから、有情の人獸蟲魚は勿論、無情の草木國土に至るまで、恰も人が本來健康を具へて居るが如く、佛たるべき性質を具へ、佛と成つて居ることが解る、それで草木國土悉皆成佛と云はれたのである。また六祖大鑑

慧能禪師はその著として傳へられて居る法寶壇經の中に、悟れば則ち衆生も是れ佛云と述べられた、語意は至つて解し易いから、別に辨ずるまでもなきことである。さりながら一應述べれば、悟つた眼から見れば一切衆生は悉くこれ佛である、未だ悟りの眼が開かなかつたならば、三世諸佛も亦未だ迷へる衆生の如くに見える、病氣すれば健康の人も病人となり、快復すれば病人も健康の人となる、病人と健康の人と元より隔のある譯でない、只だ病氣すると爲ざるとの別あるのみである。この故に釋尊成道の曉より入滅の夕に至る一代四十九年の御説法は迷へる衆生をして元來具へて居る佛の性質を徹見せし

第七問の本文

むる爲にして、即ち煩惱の病あるものをして本來成佛の健康に復せしむるの手段に外ならない。然れば釋尊開發悟道の眼より有情非情同時成道と御示しなされるのは當然のことであるとの奏對である。

勅問七日。金剛經曰。一切諸佛。及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法皆從此經出矣。金剛經是釋迦佛所説也。然曰一切諸佛從此經出。不知此經爲先耶諸佛爲先耶。

第七問本文の讀方

勅問の七に曰く、金剛經に曰く、一切諸佛及び諸佛の阿

耨多羅三藐三菩提の法は、皆この經より出づと。金剛經
 は是れ釋迦佛の所説なり、然るに一切諸佛、この經より
 出づといふ、知らず此の經を先とする耶、諸佛を先とす
 る耶。

第七問の
意義及註

金剛經といふは委しくは金剛般若波羅密多經といつて、
 大般若經六百卷の中の第五百七十七にして能斷金剛分と
 いふを別譯刊行したものである。六祖慧能大師は大に此
 經を尊崇せられたるを以て、禪家に敬重せらるゝ書とな
 った。阿耨多羅三藐三菩提は梵語で、これを漢譯すれば
 無上等正覺とか無上正偏智といつて、此の上もなき結構

な覺の法といふ意味である。さてこの經に一切諸佛も及
 び一切諸佛の最尊なる覺の法も皆この經より出づと説い
 である。金剛經は是れ諸佛の一人たる釋尊の説かれたも
 のである。然るに現在の諸佛、過去の諸佛、其他十方世
 界無量無數一切諸佛は皆この經より出づといふ。先にこ
 の經があつて諸佛は後に出たものか、或は諸佛は後に出
 たものか、或は諸佛が先にあつて、殊に釋尊の如きがあ
 つて後に金剛經が出来たといふのか、此の經と諸佛との
 前後如何に疑ひ無きこと能はず、この義如何との御下問
 である。これは畢竟此經とある經の一字を文字の儘に解
 したるより起る疑團である。この場合斯く解すべきもの

ではない。それ故に禪門では平素不立文字と喝破して、斯の如き文字に拘泥かうでいせないことになつてをる。

第七問奏對の本文

師曰。經一字。訓常訓法。法者即理也。此法理從天地未分之先。諸佛出興以前。明歷々也。契此法理。爲諸佛。違此法理。爲凡夫。仁者得之。謂之仁。智者得之。謂之智。阿耨菩提亦如此矣。

第七問奏對の本文の讀方

師曰、經の一字は、常と訓じ法と訓ず、法は即ち理なり、この法理は天地未だ分れざるの先、諸佛出興以前より、明歷々なり。この法理に契ふを、諸佛と爲し、この法理

に違ふを凡夫と爲す、仁者は之を得て、之を仁と謂ひ、智者は之を得て、之を智と謂ふ、阿耨菩提も、亦此の如し矣。

第七問奏對の意義及註

この奏對は宇宙の理は常恒不變で、天地萬物の由つて來る根元をなすこと。その不變の理を呼ぶに經の一字を以てすること。依て斯の如き金剛經の文は普通の解釋を離れ高く眼を著けて文字に拘泥すべきことを示された。さて

經の字は梵語の修多羅といふ語を翻譯したもので、原語の意味は貫線といふ義である。然るに今は義を以て經と

經

當 法

譯した。常は恒久不變の義で、春來れば百花爛熳、秋來れば千山紅葉、斯の如く千古萬古少しも變らざるをいひ。法とは軌持の義で、日は朝々東より出で、月は夜々西に沈む、少しも異動のないことが、かくの如く恒久にして不變、又規律正しくして少しも誤らぬ、天地宇宙の理は天地未だ分れざる先より存し、三世の諸佛も未だこの娑婆世界に出現せられざる以前より、明歷々として具つて居る、天の必ず高きに居り、地の必ず低きに居る、亦これ此の法理に依て然るものなれば、凡夫といひ諸佛といふも此の法理以外に存するものではない、故に此の法理に契ふて進止するものを諸佛と名け、此の法理に違ふて

凡夫諸佛

智 仁

動轉するものを凡夫といふのである、依て仁を説く所の人は此法理を自らに得るを仁といひ、智を論ずる人は此の法理を已に得るを智と稱へて居る、阿耨多羅三藐三菩提即ち此上もなき結構な覺の法といふも畢竟別物のある譯ではない、全く常恒不變の法理を指したに過ぎない。然れば金剛經に一切の諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は皆此の經より出づといふことがあるも、別に惟しむに足らない。豈夫れ一切諸佛、阿耨菩提のみならずや、天地間の一切、皆此經より出づといふことが、いひ得られるであるとの御答である。

第八問の本文

勅問八曰。經曰。大通智勝佛。十劫坐道場。佛法不現前。不得成佛道。今時人。一生坐禪修行而如何成佛道耶。

第八問本文の讀方

勅問の八に曰く、經に曰く、大通智勝佛、十劫道場に坐して、佛法現前せず、佛道を成ずるを得ずと云、今時の人、一生坐禪修行するも如何か佛道を成ぜん耶。

第八問の意義及註

此の經は妙法蓮華經の化城喩品の語である。劫は具には劫波といつて分別の義で無量の時間に名けたものと思へばよい。古來此の劫の無量なるを表すに、磐石劫・芥子

磐石喩

劫の二喩がある。磐石の喩とは方百由旬(一由旬は英里の約九哩)の石があつて人が迦尸(迦尸は良き絹布の産地なり)の輕軟の氈衣を以て百歳毎に一度び來りて之を拂ひ、石盡るに至るも劫は盡きないと。又芥子の喩は是も方百由旬の城に芥子を溢滿して長壽の人があつて百歳毎に一芥子を持ち去り、芥子悉く盡るに至るも、劫は猶ほ竭きないといふことである。

芥子喩

大通智勝佛

さてこの本文の意は過去無量時の昔に大通智勝佛といへる如來があつて、その壽命は五百四十萬億那由佗劫なりしが、その佛は初道場即ち佛道を修行する場所に坐して、十劫ともいふべき長い無量の時間、坐禪修行せられたれども佛法の功德が現はれず、成佛することが出來な

かつた、十劫を過ぎて更に更に修行して、漸く佛法の功德が現はれ、佛道を成じ、終に大通智勝佛とられた。其佛の未だ出家せられぬ前に十六人のお子があつたが皆出家成佛して阿彌陀佛も釋迦牟尼佛もその十六人中の一であつたといはれてある。然るに此の一段の因縁の中にて前の十劫の間坐禪しても佛法現前せざりしといふ語のみを取りて一則の公案となし、古來の祖師方の拈提評唱等も少くない。そこで今 後醍醐天皇も亦之を問話とせられ常濟大師の奏對を求められた。その意は大通智勝佛にして十劫の間も坐禪して佛法現前せざりしものを、今世の凡夫設ひ一生の間、如何に坐禪するとも佛道は成ぜ

第八問奏對の本文

られなからうとの御下問である。

師曰。大通智勝佛。十劫坐道場之後。佛法現前而成佛道。教中所說分明也。大通佛。以大勇猛精進力。經十劫。謂如食頃。今時人。亦具大信根。以十劫不爲遠。雖然於祖師門下。別有生涯。臨濟和尚曰。大通者。是自己於處々。達其萬法無性無相。名爲大通。智勝者。於一切處不疑。不得一法。名爲智勝。佛者。心清淨光明。透徹法界。得名爲佛。十劫坐道場者。十波羅密是。佛法不現前者。佛本不生法本不滅。云何更有現前。不得成佛道者。佛不應

更成佛云。然則以經文放在上面。以臨濟語。移來下面。見之則何有難解哉。

第八問奏對本文の讀方

師曰く、大通智勝佛は、十劫坐道場の後に、佛法現前して、而して佛道を成ぜること、教中の所説分明なり、大通佛は、大勇猛精進の力を以て、十劫を経るも、食頃の如しと謂へり、今時の人も、亦大信根を具せば、十劫を以て遠しと爲さず、然りと雖も祖師門下に於ては、別に生涯あり、臨濟和尚の曰く、大通とは、是れ自己處々に於て、其萬法の無法無相に達するを、名けて大通と爲す、智勝とは、一切處に於ては疑はず、一法を得ざるを

第八問奏對の意義及註

名けて知勝と爲す、佛とは、心清淨光明、法界に透徹するを、名けて佛と爲すことを得、十劫坐道場とは、十波羅密是れなり、佛法現前せずとは、佛本不生、法本不滅、云何ぞ更に現前することあらん、佛道を成ずることを得ずとは、佛更に成佛すべからず云。然れば則ち經文を以て、上面に放在し、臨濟の語を以て、下面に移し來りて、之を見れば則ち何の解し難きことか有らむ哉。

この奏對は要するに勇猛精進して邁往すれば十劫も敢へて長しとせず、一彈指の間にも消するを得るといふこと、更に臨濟禪師の宗眼を以て教文を自由に解釋せられ

たる所とを擧げて御答せられた。大通智勝佛十劫坐道場の後に佛法現前して佛道を成ぜしことは教中の所説分明なりといふは、即ち法華經の本文に大通智勝佛十小劫を過ぎて諸佛の法乃ち現在前し、阿耨多羅三藐三菩提を成ずとある。教家の説に據れば大通智勝佛の久しく成道せざりしは、時機を待ちてゐたのであると云つてゐる。然れども其の時機なるものは精進力の如何に依て隠れもし、顯はれもするものなれば、今大通智勝佛は絶大の奮闘努力を以て勇往邁進せられたから長い長いといふ十劫の無量時間も僅に一飯の食を喫する短時間の如くであると謂はれて居る。是れは單に過去の大通智勝佛にのみ限

らない、今時の吾人と雖も大信根即ち絶大なる信心と根氣とを以て精進せば、敢へて十劫といふも必しも遠きこととするには足らぬ、一旦夕の間にも乃至一彈指の間にも無量劫を消することも出来る。單に其許りではない祖師門下即ち達磨大師單傳の宗門には別に生涯ありとて又別段の趣き意味合といふものがある、即ち達磨大師より十一代目の法孫、臨濟義玄禪師、謂ゆる臨濟宗の高祖と仰ぐ人、その臨濟語録の中に、此の大通智勝佛十劫坐道場云の因縁に對して、宗眼を以て自由に解釋し座下の諸人に向つて、徒に文字言語に拘泥してはならぬとて、次の様に拈提評唱されて居る。大通とは人々各自行住坐臥

無性無相

到る處、觸處觸處に一切萬法の本体、無性無相なることを識得するをいふ、無性無相とは吾等は一切萬物の差別の相に執着して取捨憎愛の念を起して居るも、固より其本体は平等一如である、故に性の性とすべきなく、相の相とすべきもない、しかし何も無いといふ意味ではない、法爾如然として平等一如の理は存在して居る。只名く可きなし、之を無性無相といふ。智勝とは一切處に於て萬事萬物に對し、一念も心に疑ふことなく、取捨憎愛の念を離れて、一事一物をも執著することなきに至るをいふ。佛とは人々各自の本具の自性、清淨無垢なる智慧の大光明が、一切處に行きわたつて、法界に透徹する即ち

智勝

佛

十劫坐道場

佛法不現前

有りとは有らゆる一切の事象に通達するを云ふ。十劫坐道場とは人々各自に布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧・方便・願・力・智の十波羅密を行ずるをいふ。佛法不現前とは佛は本より萬法の上に具足せるものなれば、釋尊が奇なる哉奇なる哉、我れ一切衆生を見るに如來の智慧徳相を具有すと申されたるが如く人々個々本來成佛であるから、固より生ずるの滅するのといふ限りのものではない、法も亦本より萬事の上に現成せるものなれば無始無終である、故に是れも亦生滅の沙汰を離れて居るから、今更に別に現前せしむることを要せない、故に佛法として別に現前せざる所、是れ實に諸法眞實の相である。不

得成佛道とは人々個々本來成佛して居るものであつたならば、其の上更に成佛するといふことは、あり得べからざるものなれば斯くいつたものであると。臨濟禪師の此の評唱は人々徒らに文字章句の末に走らず、高く眼を著けて言外の深意を味はねばならぬ、然らば則ち前の法華經の文を以て上面に置き、更に臨濟禪師の語を下面に置いて佛祖の眞意如何と參究せば少しも解し難きことはありますまいとの奏對である。

第九問本文

勅問九曰。經曰。清淨行者。不入涅槃。破戒比丘。不入地獄矣。清淨行者可入涅槃。爲什麼不入。破戒

比丘可入地獄。爲什麼不入。

第九問本文の讀方

勅問の九に曰く、經に曰く、清淨の行者、涅槃に入らず、破戒の比丘地獄に入らずと。清淨の行者は涅槃に入るべし、什麼としてか入らざる。破戒の比丘は地獄に入るべし、什麼として入らざる。

第九問の意義

此經に曰くの經は大般若十六分の中、第七分を別譯したものに文殊師利所說般若波羅密經といふがある。其の經の中にある語で古來より一則の公案として諸祖の拈提も少くないのである。さて清淨の行者とて日々夜々の行持

も綿密に勤め、佛の戒法に契ふ行をして、戒徳清淨の行者が平等一如の涅槃の悟に入るといふことなく、またこれに反して佛の定められたる戒法をも守らず、無慚無愧の活計を爲しつゝある比丘即ち出家沙門が、六道の中の最も苦痛の多い地獄に墮ることがないと記してある。戒徳清淨な人は無論涅槃の悟に入る可きであるに入らず、また破戒無慚の出家は最苦痛の多き地獄に墮つべきに墮らないとすれば、是れ明かに善因善果、惡因惡果の法則に契はないことになる。この義如何に解釋して然る可きやとの御下問である。

第九問
對本文

師曰。於涅槃地獄存二見。小乘見解也。於善惡不二。邪正一如處。論什麼清淨破戒耶。圓覺了義經曰。衆生國土。同一法性。地獄天堂。皆爲淨土。一切煩惱畢竟解脫云。然則無涅槃可求。無地獄可厭。何論清淨破戒耶。

第九問
對本文
讀方

師曰く、涅槃と地獄とに於て二見を存するは、小乗の見解なり。善惡不二・邪正一如の處に於て、什麼の清淨と破戒とを論ぜん耶。圓覺了義經に曰く、衆生國土、同一法性。天堂・地獄皆淨土なり。一切煩惱、畢竟解脫云と。然らば則ち涅槃の求むべきもなく、地獄の厭ふべきもの

なし。何ぞ清淨と破戒とを論ぜん耶。

第九問奏對の意義並註

此の奏對は高尚なる平等の立場より文殊所說般若經の文を解釋せられ、更に圓覺經を引いて立證し、皮相的な文字言句に拘泥しては解釋は出來ないとのお答である。

さて世の中の人には多くは物を相對的に見て涅槃と地獄といへば全く異つた二つのものと見る、此差別相對の見方をするものを小乗の見解といふ。佛教には小乗と大乘との區別がある、此の兩者を細説すれば込入つたことにもなるが、大略を述べれば、小乗は形式を重んずるし、大乘は内容を重んずる。例へば茲に机と茶碗とがある、此

小乗と大乘
差別的と平等的

の兩者は全く異つて居るものであると見るのは小乗である。成程机と茶碗とは形に於ても違ふ、併し物質たる點に於ては二者同一であると見るのが大乘である。前者は差別的立場の見方、後者は平等的立場の見方である。この前者の見方が小乗の見解である。また善惡不二・邪正一如といふも平等の上からいへば、この通りである。善惡に對する言葉、惡といへば善を豫想して居る、皆これ差別の上の考である。若し茲に善とも惡とも附かぬ平等の理があつたならば、何と名けたものであらうか、善と名くることも出來なければ、又惡と呼ぶことも出來ない、依て之を善と名けても平等の理に背かず、惡と呼ん

でも平等の理に瑕が附かぬ、故に善と名くるも可、惡と呼ぶも可といふことになる、之を善惡不二といふ。邪正一如も亦善惡不二と同じく、邪正を離れた平等の理であつたならば、邪といふも可、正といふも可、畢竟邪正は一枚となる、之を邪正一如といふ。そこで常濟大師は文殊師説般若經の文は差別皮相の見解より見ることは出来ぬから一步を進めて平等一如の見地より解せられた。凡そ涅槃即ち常住不變の悟の境界と、六道中最苦の地獄の境界と、全く異つた二つのものと見るは、形式に捕はれた差別的皮相の見方で、佛教中小乘學者の見方である。この二見差別に執着して破戒とか不清淨とかいふことにな

地獄と天堂

れば、勢ひ清淨とか持戒とかいふことも出て來やうが、其等を絶した平等一如の悟の立場から見れば清淨だの破戒だのと名く可きものはないのは勿論である。それ故に唐の佛陀多羅といふ人の譯した大方廣圓覺修多羅了義經に衆生國土同一法性として、凡そ生きとし生ける一切衆生も、生命なき山川草木も、皆是同一なる本體本性であつて、差別の認むべきものはない。また地獄天堂に就いても同一で、六道の中の最苦の地獄と最樂の天上界と二者異らない。迷ふときは地獄は苦にして天堂は樂なりとの二見を存すれども、解脱して苦樂の二見を離れたならば、假説身は阿鼻地獄の底に居るも亦兜率の内院に居る

も區別はない、等しく淨土の生活にして即ち我等の理想とする悟の世界である。一切煩惱畢竟解脱といふのは、吾々が朝な夕な、憎い、可愛い、惜い、惜い、欲しいと煩悶懊惱して居る心其の儘が、煩惱妄想を解脱した悟の境界といふのである、如何となれば吾々の此の煩惱懊惱の心を離れて別に悟の心といふものはないからである。斯くの如く平等一如の悟の上より見れば、此の心即ち涅槃なれば此の上更に涅槃を求むる必要なく、地獄は其儘に清淨なる國土なれば之を厭ひ嫌ふ道理もない。此の高尙な立場よりして文殊所説般若經に清淨の行者涅槃に入らず、破戒の比丘地獄に入らずと述べたのでありますとの奏對

である。

第十問の本文

勅問十日。朕以趙州無公案。提撕年尙矣。以未透徹爲恨。如何工夫用心耶。

第十問の文の讀方

勅問の十に曰く、朕趙州無の公案を以て、提撕年尙し矣、未だ透徹せざるを以て恨となす、如何か工夫用心せん耶。

第十問の意義並註
趙州從諱師

趙州といふは達磨大師十世の法孫にして趙州觀音院の從諱禪師のことである。六十歳にして初て禪に參し、百二十歳まで人を化益せられた祖師門下の俊傑なれば、機に

臨み變に應じて爲人度生せられた勝跡は殆んど枚擧に違がない程で、古人も口唇皮上に光を放つと稱賛せられて居るから、特抜の機縁が澤山にある、其の中に於て此の無の公案最奇特とせられてをる。趙州、或時一僧があつて狗子に還つて佛性ありや也と問ふた。趙州曰く無と、其僧更に問ふて曰く、一切衆生皆佛性有り、狗子何としてか却て無なる、趙州曰く、伊に業識の在り有るが爲なりと。是即ち狗子には狗子の業識ありて足れり何の殊更に佛性を要せんやとの意である。然るに又或時一僧あつて、問ふ、狗子に還つて佛性ありや也と無しやと、趙州曰く有、僧曰く、既に有ならば何としてか這箇の皮

袋に撞入するや、趙州曰く、佗の知つて故らに犯すが爲なりと。先には無といひ、今は有といふ。是に於て此の一段の問答世間の一大疑問となり來つて幾多の衲子の心肝を悩したのである。公案とは委しくいへば公府の案牘で、公なる役所に於て法律規則を制定して不正の行爲あるものを治するものである。今は佛祖が爲人度生なされた因縁を以て參學の衲子を正して行くことが出来るから公案と呼ぶのである。そこで後醍醐天皇は此の無の公案に就いて、年久しく提撕し研究して居るも、尙未だ充分其の深意を知り盡すことの出来ないのは甚だ遺憾のことである、如何にして參究すべきやとの御下問である。

第十問奏
對の本文

師曰。上來勅問之中。此是最第一之義也。故爲蛇畫足。強下註脚。大慧禪師曰。僧問趙州。狗子還有佛性也無。州曰。無。此一字子。乃是摧許多惡知惡覺底器仗也。不得作有無會。不得作道理會。不得向意根下思量卜度。不得向揚眉瞬目處。跟。不得向語路上作活計。不得颺在無事甲裡。不得向舉起處承當。不得向文字中引證。但向十二時中四威儀內。時々提撕。時々舉覺。狗子還有佛性也無。曰無。不離日用。如是做工夫看。月十日。便自見得也云云。又曰。狗子還有佛性也無。州曰無。

第十問奏
對本文の
讀方

這一字子便是箇破生死疑心底刀子也。這刀子柵柄。只在當人手中。教別人下手不得。須是自家下手始得。又曰。不得向擊石火閃電光處會。直得無所用心。心無所之時。莫怕落空。這裡却是好處。驀然老鼠入牛角。便見倒斷也云云。伏願 皇帝陛下。萬機餘暇。十二時中。舉著提撕。話頭上疑破。則千疑萬疑一時破。那時徹證本地風光。本來面目。必矣。至祝至禱。

師曰く、上來勅問の中、此は是れ最も第一の義なり、故に蛇の爲に足を畫き、強て註脚を下さん。大慧禪師曰く、

趙州無の公案

僧趙州に問ふ、狗子に還て佛性ありや也た無しや、州曰く無、此の一字子、乃ち是れ許多の惡知惡覺を摧く底の器仗なり、有無の會を作すを得ざれ、道理の會を爲すを得ざれ、意根下に向て思量卜度するを得ざれ、揚眉瞬目の處に向つて蹂躞するを得ざれ、語路上に向つて活計を作すを得ざれ、無事甲裡に颺在するを得ざれ、舉起の處に向つて承當するを得ざれ、文字中に向つて引證するを得ざれ、但だ十二時中四威儀の内に向つて、時々提撕し、時々舉覺し、狗子に還つて佛性ありや也た無しや、曰く無と、日用を離れず、是の如く工夫を做して看よ、月の十日、便ち自から見得せん云。又曰く、狗子に還つ

て佛性ありや也た無しや、州曰く無、この一字子便ち是れ生死の疑心を破る底の刀子なり、この刀子の欄柄は只だ當人の手中に在り、別人をして手を下すを得ざらしむ。須らく是れ自家に手を下して始めて得べし、又曰く、擊石火閃電光の處に向つて會することを得ざれ。直に心を用ゆる所なく、心之くところ無きを得るの時、空に落るを怕るゝこと莫れ、這裡却つて是れ好處なり、驀然として老鼠牛角に入り、便ち倒斷を見ん云。伏して願くは皇帝陛下萬機の餘暇、十二時中、舉著提撕し、話頭上に疑破すれば、則ち千疑萬疑一時に破れん、那時本地の風光、本來の面目を徹證せんこと必せり矣。至祝至禱。

第十問奏對の意義並註

此の奏對は大慧宗杲禪師が趙州の無の公案を提唱した語録を引用して、此の公案は絶對界の光景を説破したものであるから、吾人相對の言語文字や、思慮分別を以て測り知ることは出来ない。故に知らんとし求めんとする心を打捨て、任運無功用に十二時中實踐躬行の上に功夫を凝らして始めて得べきなりとの御奏對である。さて趙州無の公案は實に是れ參禪學道の衲子の參究すべき、好題目にして又十種勅問中最も肝要である、故に常濟大師も充分力を濺いで御答へになつて居る。抑も無の公案は言はんと欲すれば舌頭爛れ、思はんとすれば意識摧く底

大慧禪師 (宗杲)

の道理で、言語文句や思量分別を以て測度することは出来ない。何となれば趙州の答は平等絶對の光景を假りに差別相對の言葉で言表はしたまで、あるから、有といふも無といふも世の人の考へて居る有でもなく無でもない。然るに世の人は有といへば無に對する有、無といへば有に對する無と心得るから始末がわるい、是れ固より人々各自に參究すべきものにして、他人の辯解を求むべきものではない、依て今は説く可からざることを説くを以て、蛇の爲に足を畫くとか、又強ひて註脚を下すとかいふのである。大慧禪師は諱は宗杲といひ、碧巖集を著した圓悟禪師の法嗣で達磨大師より二十一世の法孫である

此の大慧禪師の語錄の中に僧が趙州に向つて狗子に佛性ありや也た無しやと問ふた時に無と答へられた、此の無の一字、許多と澤山の惡知・惡覺即ち妄想・分別・是非・善惡を打ち摧いて、佛性の本面目を顯はす器仗即ち武器であるといはれた。然るに吾人は多く諸法に二見を存し、佛と衆生、迷と悟、生死と涅槃といふ様に二見病にかゝるから、狗子を見ては直に之に反する所の佛を思ひ、其の性の有無を量り、有と聞きては喜び、無と聞きては悲む、實に氣の毒なことである。故にその惡知惡覺を除くことを述べて、有無の解會を作してはならぬ、道理の解會を作してはならぬ、意根下に向つて思量卜度しては

ならぬ、揚眉瞬目の處に向つて蹠跟してはならぬ、揚眉とは師家が學人に向つて言外の意を知らしめんが爲に眉を揚げたり目ばたきしたりすると、蹠跟とは自由自在に變移することなく一處に止まることをいふ、語路上に向つて活計をしてはならぬ、この活計とは語路を以て安心立命をするをいふ、無事甲裏に颺在してはならぬ、これは無用の處に留まつてはならぬといふこと、舉起の處に向つて承當してはならぬ、これは他人が手を舉げたり拂子を起てたりするを見たり、又他の語を聞いて成程此處だと肯諾することをいふ、文字の中に向つて引證してはならぬ、これは經論や祖錄の文句を引いて説明し得らる

ると思ふこと。以上は要するに悪知悪覺であるから趙州無の眞意を伺ふことは出来ない。故に其等の閑事業を抛却して、但だ十二時中行住坐臥の四威儀、一切の仕るごと爲すことの上に於て、時々提撕し、時々舉覺して縁に觸れ時に應じて、趙州無の公案を念頭に浮べ、暫時も油斷せず參究し、狗子に還て佛性ありや也た無しや、曰く無と、日用の造次顛沛を離るゝことなく、日々夜々工夫に怠ること無く、純一無雜になれば、十日ならずして自然に其妙旨を見破することが出来ること示されてある。又同じく大慧禪師の語に這の一字は便ち是れ生死といひ涅槃といふが如き兩端に迷ふ所の疑心を斬却する利

刀である、這の利刀の欄柄即ち刀のツカは人々各自の手中に持つべくして、他人の手を假るべきでない、身自ら手を下して把放するに於て始めて自由の分ありと申してある。又同じく、大慧禪師の語に擊石火閃電光の處に向つて會するなといはれるが、有でもいかな無でもいかない有無を離れて、擊石火閃電光の如き機微の間に妙旨があるといへば、直に其に執して擊石火閃電光の中に領會せんと求むるが、其は不可である、一切の思量分別を打捨て、心を用ひやうとも心を活かそうともせず、任運無功用の行履にならなければならぬ、實に是れが好處である、空見に墮したやうに思ふが決してさうではな

い、此の時始めて有無を離れ、道理を絶し、豁然として絶妙の處に契當し、解脱の妙旨を獲得したといふのである。それを老鼠牛角に入り、便ち倒斷を見んと申された。老鼠牛角に入るといふ語は支那宋代の俗語である。倒斷は解脱といふに同じい、然らば之は何をいふたのであるか、年の老た鼠が牛の角の中に飛び込んだ、これでは何のことであるか要領を得ない、語を換へていへば鐵砲玉が空中に飛んで往つたといふも同じことになる、老鼠は柔かなもの弱いものである、牛角は剛いもの堅いもの、其の柔かで弱いものが剛い堅いものへ入つたといふことは剛とか柔とかいふ相對的の料簡に支配されて居る内は

分らない、一旦其相對的な柔かいとか剛いとかいふ考へを超越して絶對不二の妙境に到つた上には老鼠牛角の間に剛柔も入不入も認むべきものはない、これ即ち上に示せる心を用ふる所なく、心の之く所なき極處を指すので空に落ちるを怕るゝが如きことでは、未だ老鼠牛角に入る能はざるの分際である。依つて豁然入つて老鼠と牛角と一枚になつた時、始めて倒斷の分ありといふことが出来る。かく述べ來れば一と通りの道理は分つた様に思ふであらうけれども、それは理窟が分つたといふまでのことで、眞の無の面目を會したのでも何でもない、更に實參實究して始めて得べしである。

伏して願くば 皇帝陛下、萬機を櫛はし玉ふ餘暇もあらば、十二時中舉著提撕し日夜念頭に懸けさせられ、語黙動靜の上にも少しも油斷せず、參究せられたならば、心中に浮び來る千疑萬疑は一時に氷解し、本地の風光本來の面目現前して本具佛性の眞實相を覺了することが必然である。至祝至禱とは希望するといふ意味であるから、是非そういふことに御願ひ致したいとの奏對である。

結語

以上にて十種勅問の御話は大略を申し述べたが、筆舌は決して眞意の全般を表示すべきに非ざれば、よくく注

結語

意の上讀破して貰ひたい。且つ又この書は六百餘年前の一種の問答書だと云ふ考でなく、直に人々自己脚跟下の問題なれば實參實究すべきであることを承知せられんことを希望するのである。

後醍醐天皇十種勅問講話畢

嶽尾來尙謹述

大本山總持寺御用達

石材問屋

松原爲三郎商店

墓地工事
佛石一式
石材各種
庭石類

御用命は御一報
次第直に御伺ひ
申上げ候

横濱市鶴見區豊岡町一丁目二二七番地

電話 鶴見 二六二番

振替口座東京六〇二四五番

出張所 鶴見町一〇一四番地

電話 鶴見 二四三番

陳列所及工作所 竝材料置場同番地

裾埜冷泉居士述

● 西國 順禮 御詠歌

(定價三十錢)

原版祝融の災に遭ひ烏有に歸したるを享保に至り改版發行したる西國順禮歌詠註を現代文に敷衍改修せしもの

東京府蒲田町女塚二九〇番地

發行

他山石社

東京府池上町山下橋

頒布

天淵閣文府

(振替東京六五三一四番)

嶽尾來尙老師講述

般若心經講話

昭和六年十月改版

(定價三十錢)

同じ師家によりて

十種勅問講話

(定價五十錢)

東京府池上町山下橋

天淵閣文府發行

(振替東京六五三一四番)

講習科目 判斷力養成法、斷行力増進法、無病長壽法、
金剛力不壞身法、氣合術治療法、

講師 元代議士東京市會議長辯護士 江間俊一先生 (詳細規則書各會場宛 御申越次第送呈)

江間式心身鍛鍊法講習會々員募集

東京日時 一日より十日間午後自六時至後八時
大阪日時 一日より八日間午後自六時半至九時
名古屋日時 二十日より八日間午後自六時半至九時
會場 小石川區白山坂上江間式後援會本部電話小石川一三六〇
天王寺區生玉町四一江間式後援會大阪支部電話南五三六〇
西區江仲町二ノ六江間式後援會名古屋支部電話四二四二二
▼現代的眞人道を悟得して而も心身の健康を増進せしめ元氣膽力を養成し殊に醫藥の効なき難病を治癒せしめ眞に無病長壽を保ち立身成功を望む諸君は奮つて入會せられ人生の最大幸福に浴せられん事を切に勸む尙此の講習中無病の諸君は心身を強健ならしめ必ず多少の體重を増加するは之迄の経験に徴し明かにして且つ神經衰弱不眠症の如きは容易に全快し其の他呼吸器、胃腸、心臟等の内臟諸疾患及痔疾脱肛、リウマチス、神經痛、生殖器泌尿器病等の難病も江間大先生の治療により殆んど全癒す。▼講習會員の爲め指定旅館の設備あり。

高峰道人 江間俊一先生講述 (改訂増補) 袖珍美本三六判三方金約三百廿頁 改正定價金壹圓五拾錢郵送料四錢

江間式心身鍛鍊法并氣合術之原理

▼眞人道を悟得し判斷力を明に斷行力を鋭くし不壞身金剛力を體得し無病長壽となり活殺自在氣合術の原理を究めんとする者は一讀せられよ

◎發行所 東京市小石川區白山坂上江間式後援會本部並各支部 東京本部 電話四三〇一〇番 大阪支部 電話八一四七〇番

本書印刷ニ就テ

此ノ十種勅問講話ハ、昭和三年十二月ニ發行スル豫告マデシ
タノデアツタガ、此ノ原稿ヲ預カツタ者ガ、他ノ書類ノ中へ紛
レ込マシテ見當ラナカツタ爲メ、ノビノトナリ能所ノ迷惑
ヲ感ジタコトデアツタガ、漸ク見出シタルヲ以テ發行スルコ
トニ成リマシタモノナレバ、コ、ニ其ノコトヲ記シテ御詫ヲ
スル次第デアル。

昭和五年一月吉且

一、巻頭、後醍醐天皇聖像、奏對者太祖大師尊像を掲ぐるは當然の事なるも、之に亞ぐに提唱者嶽尾老師の肖像を列するは本書發行の意義を一層深からしむるものなれば、老師の峻拒にも拘はらず發行者にて獨斷擅行したり、成刊の曉、老師の笞責固より期する所なるも其の不興を想ふ時、渾身凜乎として顛頂爲めに慄々たるものあり、疾く負蒞して恐懼罪を寮門に待たんのみ。

一、校正は嚴密の注意を拂ひたり、但し宗門學林以外師範中等專門學校の參考書としても交渉ありたるを以て、佛教宗門特有の慣用音訓は漏れなく振假名を施したり。例へば
 行履(アンリ) 契悟(カイゴ) 各自(カクズ) 夾山(カツサン) 敬重(キヤウチュウ) 教外(ケウゲ) 功用(クウユウ) 久遠劫(クワンゴフ) 眼見(ガンケン) 解脫(ゲダツ) 健達縛(ケンダツバ) 金鉢羅華(コンバラゲ) 牛頭(ゴツ) 生命(シヤウミヤウ) 宗密(スミツ) 測度(シキタク) 傳教(デンゲウ) 刀子(タウス) 煖動(ナンドウ) 男女(ナンニョ) 凡聖(ボンシヤウ) 命終(ミヤウジウ) 妙用(メウユウ) 勇猛(ユウメウ) 永嘉(エウカ) 領會(リヤウエ) 靈鷲山(リヤウジュセン) 料簡(レウケン) 流布(ルフ) 獲得(ギャクトク) 等の如し。讀者誤植として看過するなからんことを。而して其再三出のものは漸次振假名を淘汰したり。

一、本書體裁首尾一貫せざるものあるは其整版を二三にしたるが故なり。

自一頁至二五頁	東京府新宿西沼
自三一頁至四一頁	吉谷印刷所
自二六頁至三〇頁	同上
自四二頁至五一頁	三光社印刷所
自五二頁	同上 澁谷町猿樂
至大尾	眞興社印刷所

吉谷の分、最も區々厭ふべし、是等は版を復ぬるに隨ひ更録せんことを期す。

昭和五年六月 發行 者

記念布施の辭

今茲昭和壬申の秋、石材店創業二十年の佳辰に値ふ。顧るに宿昔鶴林陵下に於て、始めて呱呱の聲を擧ぐるや、店歩艱難、夙夜焦勞、自疆不息、賴にして福運に恵まれ、隆昌今日を致せるもの、偏に御開山大師の餘光、大本山の寵護、江湖の愛顧に倚るにあらずんば、焉ぞ能く斯の如くなるを得んや。此の秋に當り、普く御開山太祖常濟大師瑩山紹瑾大和尚勅問奏對の御書を奉仕布施するは、誠に好箇記念の業にして、太祖闕極の大徳鴻恩を偲ぶ報謝行持の一端となり、且聊か江湖平生の寵恩に酬るる所以の道亦此に在りと信すれば也。

昭和七年十月令辰

合掌至禱。

横濱市鶴見區鶴見町

石材店主

大本山總持寺御用達 施主 松原爲三郎

終

